

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	事業間、対人地雷 191 発、不発弾 28 発を処理し、58,115 m ² の土地を安全化した。これにより安全な生活環境を整備し、地域の経済活動を行う環境を作り出すことに貢献できた。
(2) 事業内容	<p>(イ) 地雷・不発弾処理</p> <p>約 45 名の地雷・不発弾処理員により約 5.8 万 m²の地雷原を処理した。地雷原が計画目標の 6 万 m²にやや届かなかったのは、急斜面かつ岩場での作業のため作業速度が遅延したことが原因である。</p> <p>現地の事業管理業務は、主としてイスラマバードからの遠隔操作により行うとともに、現地出張時を利用して直接 DDG 及び MCCA 等と業務調整を行い、円滑な事業完遂に努めた。</p> <p>また、地雷等処理の中核要員に対し、OJT を通じ所望の技術的自立を達成することができた。</p> <p>別紙第 1 「3 次事業地雷処理実績」</p> <p>別紙第 2 「地雷・不発弾処理実績総括表」</p> <p>(ロ) 啓蒙活動</p> <p>10 月に事業地近傍のカラチャ村、2 月には宿舎近傍のカライヤダワナ村において村民約 470 名に対し啓蒙教育を実施した。教育は地雷の模型を使用するとともに、JMAS ロゴ入り T シャツ及びパンフレットを子供を通じて家族に配布し、啓蒙活動効果の拡大を図った。</p>
(3) 達成された効果	<p>(イ) 安全な生活環境の整備</p> <p>(a) 地雷・不発弾の処理跡地の利用</p> <p>処理完了した MF 356 (58,118 m²) では、カラチャ村とその近郊 2 か村計 3 か村の農民約 210 世帯約 1,500 名に対し放牧地として解放した。</p> <p>(b) 被害者発生状況の推移</p> <p>事業地バグラム郡内における地雷等に起因する事故の発生は、負傷者が 2 名で前期より減少 (前期は 3 名) した。また、羊 3 匹が犠牲となった。依然として早急な地雷等処理が望まれる。</p> <p>別紙第 3 「犠牲者数の推移」</p> <p>(c) 啓蒙教育</p> <p>10 月に事業近傍カラチャ村地域住民約 200 名に対し、2 月に宿舎近傍カライヤダワナ村において地域住民約 270 名、計約 470 名に対しそれぞれ啓蒙教育を行った。教育は地雷の実物大模型を使用して、住民、子供達に地雷に対する理解を深めさせ、「難民を助ける会」の協力を得てパンフレットを作成配布し、地雷・不発弾の危険性を強調した。また、JMAS ロゴ入り「地雷のない大地」と書かれた T シャツ及び文房具を子供たちに配布し、啓蒙活動の効果の拡大を図った。</p> <p>別紙第 4 「啓蒙教育実施状況」</p>

	<p>(ロ) 経済活動基盤の整備</p> <p>(a) 直接的経済効果</p> <p>MF356跡地は、岩石混じりの山腹地形であるため放牧地として利用されている。今後の家畜収入が期待される。また、操業停止していた採石場への進入が可能になったため、約30名の従業員が勤務する採石工場が再稼動し、その経済活動に直接的に貢献することができた。</p> <p>(b) 間接的経済効果</p> <p>JMAS医療班は、延べ隊員409名、村民634名を治療しているところ、村民治療は人道支援の側面だけではなく、健康回復による休業の防止・減少を通じて地域住民の経済活動を側面的に支援していると言える。</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p>(イ) JMAS物品の移譲</p> <p>JMAS事業撤収に伴い地雷処理資機材等をパートナーのDDGに譲渡した。DDGは引続き現地において事業を継続することから、JMAS譲渡物品の有効活用が期待される。</p> <p>別紙第5「DDGへの物品譲渡リスト」</p> <p>(ロ) アフガニスタン政府等との連携</p> <p>DDGへの譲渡に際して、経済省NGO局の実施する移譲点検を受検してその異常のないことを確認した。またJMAS事務所での事業終了式にMACCA長、経済省NGO局長、DDG長及び日本大使の参加を、なお、これに先立ち宿営地での処理チーム解散式には郡役場、AMAC(MACCAの地方センター)及びDDGから参加を得て記念式典を行なった際、参加者の全員からJMASに対する残留希望とともに感謝の言葉が述べられた。このことは、関係者のJMAS事業に対する高い信頼と謝意を裏付けるものである。</p> <p>処理要員は、処理作業等を通じ、事務所勤務員はその業務を通じて修得した日本的業務遂行能力を新たな職場等において発揮し、今後とも日本的価値観の普及に貢献してくれること期待している。</p> <p>(ハ) 地域住民の協力</p> <p>JMASが地雷を処理したカラチャ村及び宿舎希望のカライヤダワナ村住民からJMASに対して感謝文が寄せられた。この草の根レベルの感謝の気持ち、本事業の持続発展性を底辺から支えてきたものである。今後ともこれらの成果が子孫に受け継がれるとともに、直接裨益者以外の地域住民にもJMAS事業の実績と貢献について語り継がれることが期待される。</p> <p>別紙第6「村民の感謝文レター」</p>